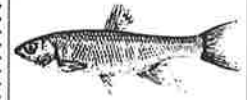


財団だより

多摩川

1993. 3 第57号



オイカワ (コイ科) ♀
多摩川中・下流部に広く生息し
流れの穏やかな砂又は砂泥底に産
卵する。



■多摩川現風景■

(13) 平井川の多自然型河川工法

東京都が管理する多摩川右岸の秋川市や日の出町を流れる平井川で、平成3年度に施行された「多自然型河川工法」による環境整備事業を見に行った。工事途中に比べると草が生え、石積の色も落ちついてきたようだが、東京都にとっては初めての本格的な多自然型河川工法だったこともあって、さまざまな課題を抱えた事業となった。そこにどんな自然を回復させようとするのかというデザインコンセプトの問題、計画の意図と現場の技術や素材との調整の問題、住民との調整などがある。東京都はこの事業ですっかり矢面に立たされたようだが、学識者や担当者による今後のあり方について検討会を行っている。この点はとても大事なことで、次の事業のため平井川の例が研究され、課題がひとつひとつ解決されていけば、近い将来良い成果に結びつくはずである。検討会のみならず、生態のモニタリングや住民の参加方

平井川の多自然型河川工法による環境整備事業
(平成5年2月撮)

式もあわせて継続的に研究が続けられることを望みたい。

●関連する財団の助成研究 (No.は報告書番号)

<学術研究>

- ①多摩川河川敷の植生の多様性についての研究
〔植生調査及び既存資料による多様性の把握〕
1981年 佐伯敏郎 東京大学 No.40
- ②護岸が流れに及ぼす効果およびアユの生育場との関連について
1988年 玉井信行 東京大学 No.113
- ③多摩川中流域における流域環境整備のための調査研究〔より良い河川環境の創出を目指した流域環境管理計画策定手法の開発〕
1989年 井出久登 東京大学 No.121
- ④多摩川流域の田園景観に関する研究 進士五十八
東京農業大学 (1993年3月研究完了予定)

多摩川散歩

——南浅川、案内川を歩く——

浅川地区環境を守る婦人の会 加藤文江

昨年9月、婦人の会のメンバーと合流点から南浅川を上流に向かって写真を撮りながら歩いてみた。私達は南浅川の水質調査を行っているの、地点の確認もしたいと思ってのことでした。盛夏、北浅川合流少し上、メタセコイアの化石を調べたり、学習会を持ったり、合流付近のアシ原に馴染みがある。

歩き始めると、両側は家、団地、工場がビッシリ、河川の水質はひどいもの。左岸に富士森高校が見えると、両岸ともコンクリート張りの護岸であるが遊歩道が続いている。川幅も広い。右岸の排水口から団地、工場等の汚水が流れ込み、臭いも強い。

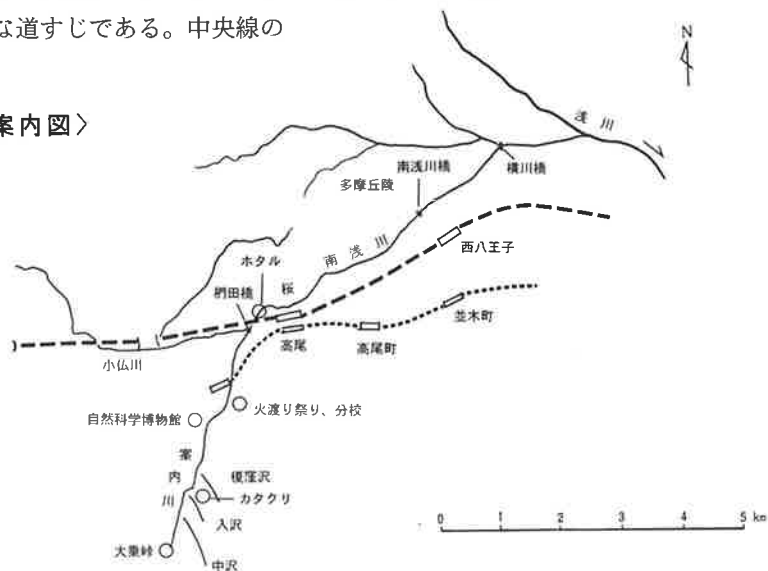
横山橋のあたりから桜並木が続いている。南浅川橋左岸に多摩丘陵、立派なケヤキ並木が参道まで続く。

この辺りから南浅川の姿は、昔に戻っている。高尾駅から下流域は最近下水道が整備され、水質は50%きれいになっている。敷島橋左岸、桜の名所浅川実験林の山並が色づいている。白山橋の近くは、でんでん淵、なみさん淵、そして瀬があり、湧水が流れ込んで詩的な道すじである。中央線の

ガードをくぐり、川も20号線を渡る。この付近で木炭の浄化実験を行って“川をきれいに”と呼びかけ、私達の運動が始まる。ここにも古淵と呼ぶ深いトロがあり、大きなオニグルミの木が川をおおっている。6月末ホルルの乱舞が見られる。柵田橋で案内川、小仏川が合流。

案内川も9月に歩いた。雨あがり、水量は多い。柵田橋から20号線に沿って南西に向かう。家並は道に沿って続きすぐ山が迫っている。高尾山口付近は雑排水が入り汚れている。高尾橋を過ぎると右岸に高尾山“火渡り祭り”広場、案内分校の可愛い木造校舎が目に入る。左岸に都立自然科学博物館、“しもばしらの花”を見るのが楽しみ。右岸、梅の木平はカタクリの里。そして榎窪沢、入沢（いらざわ）、中沢と深い沢があり、運が良いと“衣がさ茸”に会える。蛇行しながら西、源流大乗峠に至る。案内川には18の橋がかかり、橋には由来がある。南浅川は高尾山、景信山、小仏峠から始まり約8.5kmの流れ。山から高尾の街の中をゆっくり流れ、蛇行しながら淵をつくり、瀬が出来、川幅を広げて流下する。この原風景をそのまま残したいと強く思う。小仏川については次回ご案内したい。

〈案内図〉



私と多摩川

●私と野川



左岸に遊水池ができる前の野川と
くじら山下の原っぱ

エコロジカル野川実行委員会 若竹 稜子

だれにもある、幼い日々の「思い出の原風景」…私にとってのそれは「野川」と「くじら山下原っぱ」でした。家の門からまっすぐ一分で野川、そこからてくてく歩いて十五分で原っぱに着きます。

小学校1～2年生にとって家から遊び場までの距離は限られているものですが野川で遊ぶ時だけは違いました。

1970年代は高度経済成長期の延長線の時期。野川にゴミはあふれ、異臭漂う流れでしたが、臭いを我慢すれば、水の流れの面白さに誘われてどんどん川下へ…。栄養がよすぎる巨大なクローバーから四ツ葉を探しながら川岸をどこまでも…。気がつけば土手の外は見知らぬ風景。でも安心。川はどこまでも一本だから道に迷う心配がないのです。「おなかすいたから帰ろうか」で、今来た土手をUターン。

野川は、国分寺市の日立中央研究所に湧く泉をはじめ、名水百選に選ばれた真姿の池、小金井市の滄浪泉園など、武蔵野台地を北西から南東に走る「ハケ」と呼ばれる国分寺崖線に湧く湧水を集め流れる多摩川の支流。全長20.2キロメートル、

他に府中・三鷹・調布・狛江・世田谷の計六市一区を通る一級河川です。

夏休みのある日、学校のとなりの都立武蔵野公園を通過して「くじら山下原っぱ」へ出ると、いつもの草原がなんと遊園地（に見えた）に変わっていました。それは地域の市民団体や個人、児童館、青年会議所などが手を結び、清流野川の復活を願って生まれた「第1回（1975）わんぱく夏まつり」会場でありました。

2.2ヘクタール（後楽園球場二つ分）のいつもは草だけの河川敷いっばいに、アスレチック遊具や廃材の小屋、釣り堀、くじら山のやぐらから100メートルのワイヤーで滑り降りる「人間ケーブル」そして野川には吊り橋など、まるで夢の世界！。「まだあるかな？」翌日も行ってみた私達をわんぱく村はちゃんと迎えてくれました。楽しいお祭りは三日間だけ。四日目には跡形もなく消え去ったのでした。

以来私は昨年（2022）の第18回わんぱく夏まつりまで毎年参加しています。

わんぱく村の夜はとりわけ面白く、土日にかけて行われる「星空交流会」では地域の話、野川の未来、子どもを取り巻く環境などについて、地域に暮らす市民が昼間の仮面を捨てて、焚火を囲んでのオーバーナイトディスカッションを繰り広げます。

昼と夜の顔を持つ地域の住人たち。その奇妙さ面白さ。

実行委員会に招じ入れられたのは高校生になったとき。地域の大人の仲間入りです。

わんぱく夏まつりが素晴らしいのは、星空交流会のような、立場を越えた平場のやりとりが可能だということ。それは互いに育ち合える機会を創り、自分の意見を持つ市民を基礎に成り立つ「住民参加」のまちづくりにとっても重要だということ。この地域に生まれたことと、私たちのまちを野川が流れていてくれたことを誇りに思います。

よみがえ

甦れ！多摩川

■多摩川の復権・第2回国際シンポジウムをふり返って

財団専任研究員 山道省三



外国の専門家を招いて行った多摩川での研修会
福生市中央公園

2月20日土曜日の午後から福生市市民会館で、TAMAらいふ21協会主催の「第2回多摩川の復権国際シンポジウム」が開かれた。シンポジウムのコーディネーター役をおおせつかった立場で感想を述べてみたい。今回の主旨は、川と住民の新たな関わり合いを模索するため、外国の事例を学ぶとともに今後、多摩川の利用や管理・運営に住民がどう参加していけば良いのかを考えることがテーマだった。

イギリスからは、運河の管理・運営を行っているB.W (British Water ways) の環境科学担当のロジャー・ハンベリー氏、ドイツからカールスルーエ大学で近自然河川工法や自然生態を専門とするピーター・ラールセン氏を招いた。お二人は当方の申し出を快く引き受けて下さり、大いに関心を持って下さったことから、せっかくの機会だからということで、シンポジウムに先立つ17日、18日の2日間、多摩川を案内し、魚道の整備や水質浄化施設、多自然型工法による環境整備事業を見てもらい感想を聞いてみた。その結果、自国での例を混えながら貴重なアドバイスを受けた。その概要を整理すると次のような点であった。

- 川の自然回復を図る基本的な視点は、人工

的な施設整備によって自然を回復するのではなく、川に自由性を与えることで自ずと自然回復をさせるという立場に立つことである。

- 自然回復のため事業を行うにあたって、地域住民の意見をどのように取り入れているのか？ 事業の目的を住民に理解してもらえない限り、せっかく回復した自然もうまく保全されていかないのではないかと。日常的に住民とのコミュニケーションを図るとともに計画段階から積極的に参加させる仕組みを考えるべきだ。ドイツでは「水辺の里親制度」といったものがあり、川の環境を自分で守りたい人たちが登録し管理活動を行っている。
- 自然回復のための事業を行うにあたって生態的な調査を事前、事後にわたって行うべきで、その事業がどのような効果や結果をもたらしたかモニタリングを行う必要がある。データのストックを積み重ねることで、将来の事業に大いに役立つ。ドイツでは、エコロジカル・リバー・トレーニングといって調査のための試験区を設けている。

以上のような観点は日本でもたびたび議論されてきたが、実際にイギリスやドイツでは定着し成果を挙げているようで現実的な問題提起であった。

シンポジウムでは、日本から新潟大学の犬熊孝氏、建設省から関正和氏に出席していただき、日本の実情や今後の政策について紹介するとともに上記の提言を受けて議論した。

多摩川の復権を考えるにあたり、その利用や保全について地域住民にどう協力してもらうかは、当然考えなければならないことだ。その意味では、このシンポジウムを通じて得られた知見は大きな成果であった。

財団からのお知らせ

<第二次研究助成選考結果>

去る10月7日第33回定時選考委員会を開催し、平成4年度（第2次）研究課題の選考を行いました。今回選考された研究は学術研究、一般研究各1件です。研究課題は次のとおりです。

| 研 究 課 題 | 代表研究者 | 所 属 |
|--|-----------|-------------------------|
| (学術研究) ●三頭山における集中豪雨被害の緊急調査と森林の成立条件の再検討 | 小 泉 武 栄 | 東京学芸大学教育学部 助教授 |
| (一般研究) ●多摩川流域の考古学的遺跡における石器石材の獲得と活用について -野川、仙川、大栗川、乞田川流域を中心として- | 比 田 井 民 子 | 東京都埋蔵文化財センター 主任調査研究員 |

<研究助成報告書完成>

助成集報（19巻）並びに多摩川環境調査助成集（第13巻）が完成しました。

助成集報第19巻

| 研 究 課 題 | 代表研究者 | 所 属 |
|---------------------------------|---------|----------------------------------|
| ●多摩川流域の土地利用論〔先史考古学研究からのアプローチ〕 | 佐 藤 宏 之 | (財)東京都埋蔵文化財センター研究員 |
| ●多摩川・隅田川両水系の浮世絵による利用行為を軸とする比較研究 | 長 屋 静 子 | 水環境造形研究会研究員 |
| ●多摩川における最適な取水システムに関する研究 | 松 井 健 | (財)環境情報科学センター理事長 東京農工大学農学部助教授 |
| ●多摩川流域の生態学的環境指標策定のための手法開発 | 福 嶋 司 | 都立大学理学部教授 |
| ●多摩川水系東京都地域内の絶滅危惧植物の現況に関する調査研究 | 小 野 幹 雄 | 東京経済大学教授 |
| ●多摩川活性化の方途〔水と親しめる町づくり〕 | 柴 田 徳 衛 | |

多摩川環境調査助成集第13巻

| 研 究 課 題 | 代表研究者 | 所 属 |
|--|---------|---------------|
| ●玉川上水系の用水流域住民の意識調査および水辺レクリエーションに関する調査 | 小 坂 克 信 | 八王子市立第三小学校教諭 |
| ●多摩川に再びメダカを「多摩川水系のメダカの分布生態調査とメダカ放流をめざして」 | 磯 村 康 博 | 横浜市水道局水質試験所職員 |
| ●多摩川中流域に分布する上総層群の古環境解析とそれに基づく地質野外実習教材の開発 | 松 川 正 樹 | 愛媛大学理学部助教授 |
| ●多摩川支川のケイ藻の分類と生態 | 赤 星 公 子 | 元、東京女子体育大学職員 |
| ●河川の学習機能に関する研究-多摩川及び横浜市内河川における子どもたちの活動をケーススタディとして- | 並 木 直 美 | よこはまかわをを考える会 |
| ●日野台地の開発と水文環境の変化に関する研究 | 角 田 清 美 | 都立小平南高校教諭 |

寄贈文献の紹介

●「みんなの地球」—環境問題がよくわかる本—

浦野紘平 著 1992年 (株)オーム社 発行
工学博士の著者が地球環境問題となっている地球温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨、熱帯林、海洋・河川汚染等をイラストを用いて平易に解説している。

●「水談義」

堀越正雄 著 1993年 (株)論創社 発行
1915年生まれの著者が東京市（都）水道局に勤務し東京都水道史等の編纂に従事し、同局を退職後も一貫して「水」問題に取り組んで来た著者の水に関する歴史書とも言える。

多摩ルネッサンスシンポジウムに参加して

昨年11月14日、調布市の電気通信大学において多摩ルネッサンスシンポジウム'92が行われた。1984年から9回にわたり開催されている。多摩川流域の大学を中心として多摩地域の科学技術の振興のためのルネッサンス活動である。

今回のテーマは、「人間と科学技術の調和」
「ハイテクは東京 多摩の自然と人間を救えるか？」であった。午前中は基調講演、午後は五つのセッションに分かれ、それぞれ環境、広域的整備、交通問題、ゴミ、地域情報化について、パネルディスカッションが行われた。

セッションBでは「多摩の水と環境」をテーマにパネルディスカッションが行われた。東京農工大の小倉教授を中心に、多摩川流域で環境問題に実践的に取り組んでおられる生活者のパネリストの方々の地域における活動に基づく実感を吐露された素晴らしいシンポジウムであった。多摩の水と環境について問題点の指摘、それに対して何をなすべきかについては行政、市民、専門家の協力によって地下水、湧水を保全し水循環の正常化を図るべきであるとの指摘があった。行政に対しては住民参加の環境行政、企業に対しては行動責任を自覚し、積極的に地域の活動に参加し、市民の活動を支援すること。大学に対しては住民に研究成果を公開し、適切なアドバイスをおこなってほしい、との意見があった。パネリストの皆様が実際に多摩地域で活動しておられる方々ばかりなので迫力のある提言が多く、非常に貴重な機会であった。しかし、電気通信大というハイテク技術の最先端を担うキャンパスにしては、意欲ある若

人が会場を埋めるのではと思っていたが、少々期待はずれであった。

若い人々はマルチメディア、ハイビジョンのコーナーには集まっているが、遠い自分たちの未来=気がついた時はもう遅いかも知れない未来には関心を示さなかった。科学技術はあくまでも人間を幸福にするためのツールに過ぎない、「玩物喪志」という言葉があるが、若い人がハイテクを東京と多摩の自然を救う技術として駆使することに関心を持たなければ地球を救うことはできない。

寒々とした階段教室の会場のまばらな聴衆、「貴方は最近、多摩川或いはその支流に行かれたことがありますか」とのコーディネーターの問いかけにもほとんどの人が行ってないとの反応であった。自然とのふれあいといっても、今ではテレビの画面で間接的に見ることで満足しているのだろうか。最近も著名な生態学の先生から、最近の若い人はフィールドワークに関心を示さない人が多いとの発言を聞いた事がある。環境問題もトレンドな話題の一つとしてしか考えられていないのではと心配になった。今年も多摩ルネッサンスシンポジウム'93が行われる。7月上旬(2日～11日)、多摩地域の各大学、公共施設でテーマ別シンポジウムが開催される。多摩の環境については7月5日(月)東京農工大学で行われる予定である。

大学が、若者が身近かな多摩の環境に関心を持つ絶好の機会である。是非多数の方々の参加があることを心から期待したい。

芳村 重徳

- ・発行日 平成5年3月1日
- ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)3400-9142
FAX (03)3400-9141

